

# 乳がん 高度検診・治療センター NEW-す NO.78

2020.11



## 妊娠中の乳がん診療について

わが国の乳がんはどの年齢層でも増加しており、若年者の乳がんも増えています。また、日本人女性の晩婚化の影響もあって、妊娠中に乳がんが見つかることもまれではありません。妊娠中の乳がんでは診療上配慮すべき点がいくつかありますので、留意すべき点を整理しました。

### 妊娠の乳がんへの影響

妊娠中に乳がんが見つかったとしても、その継続や出産・授乳によりがんの進行が早まることはありません。しかし、検査や手術、放射線療法、薬物療法などは妊娠の時期によって胎児に影響を与える可能性があります。いくつかの制約があります。特に妊娠前期（妊娠15週まで）の検査や治療は流産や胎児の奇形につながる危険性があるので注意が必要です。

### 妊娠中の乳がん検査

妊娠中の乳がん検査として超音波検査や細胞診・針生検などは何ら支障ありません。一方、マンモグラフィは腹部を鉛板で保護しながら受けることが可能ですが、できれば避けたいところです。CTやMRIも、特に妊娠前期ではどうしても必要な場合を除き行わないのが無難でしょう。

### 妊娠中の乳がんの治療

がんの性質や進行程度（病期）により治療法が選別されるのは妊娠期以外の乳がんと変わりません。ただ、妊娠中のどの時期かによって対応が異なってきます。放射線療法やホルモン療法（内分泌療法）は妊娠中のいかなる時期でも行いません。

#### (1) 妊娠前期

全身麻酔による流産の影響があるので手術は妊娠中期まで待つ必要があります。その他の治療も妊娠前期には行うべきではありません。中絶の選択肢もないわけではありませんが、担当医と十分に相談して納得のいく方法を選択してください。

#### (2) 妊娠中期以降（妊娠16週以降）

麻酔科医・産科医との連携のもとに手術は可能です。乳房温存手術などで術後に放射線療法が必要な場合は、術後に行うことになります。

抗がん剤（化学療法）は胎児に奇形をおこす危険性があり、使用する薬剤は限られます。ハーセプチンも安全性は保証されていません。

ご不明な点は担当医にご相談されるか、下記の資料などをご参照ください。

参考資料：患者さん向け冊子「妊娠中の乳がん—不安を抱えているあなたへ—」  
「お母さんのためのSTEP NOTE—妊娠期乳がん連携手帳—」（ともに日本乳癌学会  
ホームページ 市民の皆さまへ<http://jbcs.gr.jp/forcitizens> より閲覧可能です）



市立貝塚病院  
TEL : 072-422-5865

乳腺外科 稲治 英生

